
ケモノ姫

いぬらぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケモノ姫

【Nコード】

N8978G

【作者名】

いぬらぶ

【あらすじ】

神やら姫やら王子やらが出てくるお話。

はるか昔のこと。

世界は闇に包まれようとしていた。

街には疫病や魔獣が蔓延り、人々は外に出るのを恐れた。

各国の王達は魔獣を退治するために兵を派遣したが、魔獣達の方が圧倒的に強かった。

人々は日々、いるともわからぬ神々に祈りをささげた。

そんな地上のあまりの酷さを哀れに思ったのか、ある日、男神リーダと女神リラーシャが彼らに仕える7体の神獣と共に地上に降り立った。

二人の神は神獣達と共にあつという間に闇に属する者たちを大陸の果てに追いやった。

そして地上には平和が訪れたのだった。

その後、神は天界に帰り、彼らに仕えていた神獣たちは地上の者と交わり地上を支え続けた。

そして、その神獣たちの血を受け継ぐ者たちはやがて、7大国と呼ばれるほど大きな国を建国した。

ミーシャはこの頃、ひどく不機嫌だった。

行儀悪く机に肘をつき、燃えるような長い髪に指を絡ませ、整った顔を少々歪めながらバルコニーから見える街の風景を眺める。

街は心なしか桃色の空気に包まれているようにミーシャには見えた・・・というか実際に街には今、どこもかしこもカップルでいっぱいだ。

繁殖期だから。

なんだか生々しいが仕方がない。ここに・・・いやこの世界に住む者はみんな人間ではない。ここに住む者はみんな神または神獣として神獣に仕える眷属なのだ。

そして神獣や眷属達には繁殖期がある。それが今の時期なのだ。

去年までは、この時期になっても別に気にはならなかった。

しかし、今年は違う。

ミーシャは今年、成獣・・・大人になった。成獣になったら基本的に結婚ができる。そしてたいていの者たちは成獣になったとたん結婚をする。現にミーシャに仕える侍女や友人たちはそろって結婚した。ミーシャの姉も成獣になると同時に嫁いだらしい。まあ、姉

とは50年ほど年が離れているので定かではないが。

しかし、ミーシャは結婚をしなかった・・・否、できなかったのだ。というのも、ミーシャはかつて地上に降りた7神獣のひとつ龍の一族の直系の血をひく王女だったためだ。彼女は50年ぶりに生まれた最も高貴な血をひく姫であり、龍族の中に年が割と近く、身分の釣り合うものがいなかったためだ。実際には少数いたのだが、女癖がとて悪くキツパリとお断りした。その他の身分の釣り合う者はまだ成獣になっていない・・・生まれたばかりの者ばかりだ。父である王は彼らが成獣になるまで待て、などと嬉しそうな顔で言っていたが、ミーシャは待っているなど絶対に嫌だった。

完全に行き遅れじゃない。

はつきりいうと、自分では身分の釣り合いなどどうでもよかった。

だから、身近の者でも・・・と思っていたのだが、なぜか自分の周りにいる男はみんな結婚済み・・・しかもかなり年をとっている者ばかりだった。

なら自分を守る騎士・・・などと考えたが、自分には戦闘に長けた侍女がいたため騎士が付けられていなかった。それにミーシャはさすが王家の直系というべきか、そこらにいる騎士たちが束になっても簡単に勝ててしまうほど強かった・・・もしかしたらそのせいで結婚できなかったのでは？などと今更ながら思う。

「どこかにいい男いないかしら・・・？うううっ、いい男いねえか
！！？」

周りにいる侍女たちが少し変な顔をしたが気にしない。というか

侍女たちはみんな既婚者だ。絶対に自分の気持など分かるまい。だから無視だ！！

『あらあら・・・ミーシャ、少しはしたなくてよ？ 外にまで聞こえてきたわよ』

急に後ろから声が聞こえてきた。咄嗟に首をグリンツと回して声のした方を見る。数秒の間、相手が認識できなくてマジマジと見てしまった。そして誰だか理解したとたん勢いよく膝をついた。その時、あまりに勢いが良すぎて膝の頭を強く打ってしまい少し、涙がにじんだ。

声をかけたのは、腰まである黒く艶やかな髪を持つ麗しの美女・・・この世界にいる二人の神の一人、創造神であり、すべての母と言われている女神リラーシャだった。

『あらあら、今すごい音がしたわよ。大丈夫？そんなに勢いよく膝をつく必要ないわ。あちらの席に移動しましょう。少し話したいことがあるのよ』

女神にそう言われ、すごすごと部屋の中央にあるソファーに移動した。

向かい合ってソファーに座る。少し気まずい。さっきの男発言や膝のことなどを聞かれてしまった・・・しかも世界の頂点たる女神さまに・・・。

少しだけ目を侍女たちが素早く用意した紅茶に向けながら、相手と話すのを待つ。自分から話すのは少し気が引けるし、何より女神が話したいことがあると言ったのだ。ここはじっと待つべきだろう。

女神は出された紅茶を優雅な手つきで取り、少しだけ飲み息をつくと話し始めた。

『今回は残念だったわね・・・でも、きつとすぐに見つかるわ！だからそんな悲観したような顔しないでね！？』

女神に励まされた・・・うれしいどころか余計に凹んだ。

そんなに自分は酷いだろうか・・・。

『まあ、そんなことより、私が話したいのは別のことなのよね・・・

『・』

女神は少し戸惑ったように言葉を切った。

そんなこと扱いされてしまったのもショックだったが、少し気になる。

どうしたの？と尋ねるように上目で見ると、女神はまた話し始めた。

『ミーシャは地上のことをどこまで知っていて？もちろん7カ国のことは知っているでしょうけど、その国々が今どうなっているかは理解しているかしら？』

いきなり地上のことを聞かれた。正直少し困った。この頃・・・だいぶ前から成獣になったことを理由にまともに勉強をしてなかったからサツパリだ！！

まあ、知ったふりをするのもどうかと思うから、ここははつきり言おう。

「申し訳ありません。お恥ずかしながら、この頃授業をあまり受けていなかったので詳しくは知らないのです」

『そう・・・では、やはりドルラード王国のことも知らないかしら？』

ドルラード王国とは、龍の血をひく者が建てた王国だ。スゴク遠い親戚でもある。その王国がどうかしたのだろうか？

「なにか変わったことでもあったのですか？ 同じ血を引くもの

として少し気になります」

なら自分で調べろという感じだが、女神に聞く方が詳しく解るだろう。侍女たちも聞き耳を立てているようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8978g/>

ケモノ姫

2010年10月8日23時51分発行